

令和三年度

# 国語 (B1)

試験時間 五十分

## 注意

1. 解答用紙について
  - ① 解答用紙は、問題用紙の間にはさんであります。解答用紙がない場合は、手をあげて係の先生に申し出なさい。
  - ② 所定の欄らんに受験番号・氏名を書きなさい。
  - ③ 答えはすべて解答用紙の決められたところに、はっきり書きなさい。
  - ④ 書き間違まちがえたときは、消しゴムできちんと消してから書き直しなさい。
2. 問題用紙について
  - ① 問題用紙の所定の欄らんに受験番号・氏名を書きなさい。
  - ② 印刷のはっきりしないところ等があれば、手をあげて係の先生に聞きなさい。
3. 解答について
  - ① 特に指示がなければ、書き抜きや記述の問題は句読点を文字数に含みません。

受験番号				氏名	フリガナ
			番		

# 1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ヒトの社会性は生物学の観点からは極めて特殊です。全く血縁関係のない個体どうしが協力しますが、もちろん協力するのは見返りを期待してのことが多いでしょうが、普通の生物はたとえ見返りがあっても協力しないのです。なぜヒトだけがこんなにも協力をするようになったのでしょうか？

ヒトは、7000年ほど前には、血縁のない個体間での協力により都市を作っていたといわれています。それ以前はライオンやオオカミのように協力関係は一族の中に限られていました。日本であれば縄文時代にあたるでしょうか。

その時代、ヒトは家族を中心とした小規模な単位で生活していて、もっぱら狩猟と採集に頼った生活をしていたと考えられています。力の強い男性は狩りへ行き、女性や子供は食べられる木の実や植物の採集で食料を得ていました。同じ場所で暮らしているは獲物を捕りつくしてしまうので、移動しながら暮らしていたと見られています。

①狩猟採集生活では、一人あたり生きていくのに、東京ドーム5個分の土地（約25万平方メートル）が必要だといわれています。そのくらいなければ食料をとりつくしてしまうからです。必然的にヒトは、小規模な集団で分散して暮らすことになります。助け合うのは家族など近しい親類だけで十分です。それ以上人が増えても、食い扶持（もち）がないからです。

状況が変わるのは小麦や米の栽培が始まってからです。農耕が始まると、土地の単位面積あたりに得られるカロリーが大きく上昇します。その結果、農耕生活では一人あたり生きていくのに2500平方メートルで十分になりました。単純計算では狩猟採集生活に比べて100倍の人口密度が達成できます。つまり、多くの人は集まって暮らすことができるようになったことを意味しています。

農耕には労働力が必要です。土を耕し種をまき、水をやり雑草をとり、動物から作物を守り収穫をしなければなりません。家族だけでやるよりも、家族以外の人と協力していくほうが有利になります。みんなで協力すれば畑を大きくすることができ、それによつてますます人口が増えていきます。

②農耕社会では、狩猟社会と違って獲物を求めて移動する必要がなくなりました。移動は出産頻度を制限する要因になります。妊娠中や乳児がいると移動は困難だからです。移動の必要のなくなった農耕社会では、出産頻度がおよそ2倍高くなったといわれています。これによつてますます人口が増えていくことになりました。

人がたくさんいれば分業して専門家が生まれるようになります。家族単位で狩猟生活をしていたときは、生活に必要なものはすべて家族内で賄まかわなければなりません。服も靴も自分たちで作らなければいけません。病気やけがをすれば自分たちで治療しなければいけません。それも、毎日の食料を探しながらです。

一方で、人がたくさんいれば、人に頼ることができません。例えば服を作るのが上手な人がいれば、その人は服を作つてそれを食べ物と交換してもらつて生きていくことができます。そうなればその人は農作業や狩りをする必要がなく、毎日服を作るだけで暮らしていけます。そして技術は向上し、どんどん良い服が作れるようになります。薬草に詳しい人は医者のような役割を担うことになるでしょう。そうした専門家が生まれると、共同体全体の生活の質が上がっていくことになります。

共同体の規模が大きくなつていけば、村、町、都市が形成されます。人口が多くなるにつれて分業はどんどん細分化し、各専門家の技術はどんどん向上していきます。人口が多ければ、一度獲得した技術は失われることはありません。誰かが引き継いでくれる確率が高まるからです。技術が引き継がれれば、次第に改良されて科学技術が発展していきます。

科学技術の発展は死亡率を下げ、寿命を延ばし、さらに人口を増やすことになります。人口が増

えれば熱意と才能のある人が生まれ、彼らは得意分野に専念することができるようになり、さらに科学技術を発展させていくでしょう。科学技術と人口は相乗的に増えていき、エネルギー・食料不足や疾病しゅびいなど様々な問題を次々に生み、そして解決していきます。<sup>③</sup>そうした文明の最先端にいるのが私たちヒトです。

こうした人類の発展の土台となるのは、血縁のない個体間での分業です。分業が可能となる前提は人と人との協力関係にあります。服を専門に作る人が暮らしていくためには、服を提供する代わりに、食料やその他の必需品を別の人が分けてくれるという前提があります。もし、急に食料を作る人が独り占めしてしまったとしたら、他の人は死んでしまいます。よっぽど他の人を信頼していないと分業は成立しません。

ヒトはどうして血縁のない他人を信頼できるのでしょうか。次にこの点を考えてみたいと思います。血縁関係がない個体どうしが協力できるのは、どうもヒトに備わる稀有※けうな性質のようです。例えば、<sup>④</sup>チンパンジーはヒトと遺伝子にしてわずか1・2%しか変わらず、知能もヒトの幼児よりも高いくらいで、そのふるまいも人間じみています。しかし、人間であれば当たり前にすることをチンパンジーは決してしません。交換と助け合いです。

チンパンジーは食物の交換をしません。たとえ自分が食べきれないほどたくさんのお腹を持っていて、もっとおいしいものとの交換を持ちかけられたとしても応じません。チンパンジーは、一瞬であつても今持っている食べ物を失うことを嫌うのです。

ところが、ヒトはそうではありません。人間の社会は交換にあふれています。ものを買うときは必ず商品とお金を交換します。クレジットカードを使えば、先に商品だけを手に入れて後で支払うこともできます。最近ではネットオークションで、個人どうしがものやり取りも行います。ほとんどの人はちよろまかすようなことはしませんし、交換することになんかの抵抗も感じません。このヒトがなんの苦もなく行っている交換を、チンパンジーはできないのです。

チンパンジーは助け合いもしないことが知られています。ただ、他のチンパンジーを助けることはあります。他のチンパンジーのために檻かごを開けてあげたり、人間を助けるようなふるまいも観察されています。まれにはありますが、食物を他のチンパンジーに分け与えることもあるようです。しかし、チンパンジーが他の個体を助けた場合、助けられたほうのふるまいは人間の場合とは大きく異なります。チンパンジーはたとえ助けてもらってもお返しをしないのです。助けたほうもお返しを期待しないようです。つまり、「助ける」という行為はあつても、それは「助け合い」にまで発展しないのです。

これに対して、ヒトは助け合います。

(中略)

助け合いの精神は現在でもそこら中に見られます。困っている人を見かけたら、たいていの人は助けようとするでしょう。そして、助けられた人はお礼をしようとするでしょう。チンパンジーとは違ってヒトは進んで助け合う生き物です。もちろん個人差はあるでしょうが、どんな冷淡な人でもチンパンジーに比べればよっぽど親切なはずですよ。

こうした他人を信頼して思いやって助け合うというヒトの稀有な性質が、血縁のない個体間での協力を可能にしたと考えられています。

このような信頼と助け合いの精神は、ヒトの持つ特殊な心のおかげだと考えられています。もっと具体的にいえば、ヒトの持つ高い共感能力によりです。相手がうれしければ自分もうれしくなり、相手が悲しければ自分も悲しくなり、笑いかけられれば、ついこちらも笑ってしまうという能力です。共感とは相手の感情が自分の感情になるということです。

さらに、ヒトは相手の気持ちを想像することができます。相手の気持ちが想像できるようになると、相手を助ければ相手が自分に感謝することを予想できるようになります。そうなれば相手からの助けも期待することができます。そうすれば私があなたを助け、あなたが私を助けるという助け

合いの関係が生まれます。助け合いが続けば相手との信頼関係が生まれます。自分が協力すれば、きつと相手も協力してくれることが信じられるようになるのです。信頼関係が築かれたことによつて、初めて物と物を交換することが可能になります。交換は信頼できる相手としかできません。信頼できない相手は、偽物を渡してくるかもしれないし、受け取るだけ受け取って逃げてしまふかもしれないからです。

信頼関係のない相手との交換の難しさは、ドラマでよく見る誘拐事件の身代金の受け渡しを思い浮かべてもらえばわかりやすいでしょう。誘拐犯も被害者と警察側もどちらも相手に騙されたいように必死になります。そんな関係では継続的な交換などできません。

交換ができるようになって初めて分業が可能になります。交換ができるのであれば、生活必需品をすべて自分で作る必要はなくなり、それよりも人が欲しがらうような素晴らしい物を作ればよくありません。専門家が誕生し、技術が発達していくこととなります。かくしてヒトは生物史上例のない巨大で発展した社会を作り上げたのです。

(市橋伯一「協力と裏切りの生命進化史」より。本文には一部手を加えてある。)

※稀有……めつたになく珍しいこと。

問1. ぶんたさんとりこさんは、——線部①「狩猟採集生活」②「農耕社会」の違いについて次のように表にまとめました。表と、それについての二人の話し合いについて答えなさい。

	血縁	人口	土地	労働
狩猟採集	ある	少ない	広い	(A)しない
農耕	ない	多い	狭い	(B)する

りこ：(い)は、(ろ)より広い土地でも少ない数しか生きられないことがわかります。

ぶんた：だから、(は)では血縁のある単位だけで(B)するので十分だったのですね。

りこ：(に)では、血縁がない相手とも(B)するほうが有利になると筆者は言っています。

ぶんた：多くの人と(B)するには、自分の得意なことを生かして(A)すると効率がいいようです。これが結果的には専門家の誕生にも繋がったと書いてあります。りこ：専門家の優れた知識や技術によって、一人では解決できない問題も解決できるようになりますね。

ぶんた：(い)から(ろ)へ変化したことには、こんな意味があったのだと気づくことができました。

(1) 空欄 (A) (B) に当てはまる語句を、文中からそれぞれ漢字二字で抜き出さない。

(2) (い) ( ) ( ) に当てはまる語句を次のア～イの中から一つ選び、記号で答えなさい。  
なお、同じものを繰り返し使ってもよい。

ア. 狩猟採集生活    イ. 農耕社会

(3) 人口増加の背景の説明として間違っているものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 食糧を求めて移動する必要がなくなったことで出産が制限されなくなったから。

イ. 狭い面積の土地でも多くのヒトを養うカロリーが確保できるようになったから。

ウ. 技術が受け継がれ発展することでエネルギーや病気などの問題が解決される機会が増えたから。

エ. 科学技術が向上し生活の質が良くなることで村や都市のような安全な環境が確保されたから。

オ. 多くの人と協力することで生活する上でのそれぞれの仕事の負担が減ることに繋がったから。

問2. —線部③「そうした文明の最先端」と同じ意味を表す語句を文中から十七字で抜き出さない。

問3. —線部④「チンパンジー」の例により筆者が伝えたかったこととして正しいものには○、間違っているものには×を解答欄に記入しなさい。

ア. チンパンジーはヒトに比べて冷淡な生物であること。

イ. ヒトの社会は信頼を基盤にして成り立っていること。

ウ. 想像力や共感、ヒトが持つまれな性質であること。

エ. 交換は相手への信頼に基づく行いであるということ。

オ. チンパンジーと人間は遺伝子上ほぼ同じであること。

問4. 本文の題名として最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア. 農耕生活はヒトの暮らしを変えた。

イ. 協力がヒトの社会を発展させることになったわけ。

ウ. 普通の生物にないヒトの性質とは何か。

エ. ヒトの社会を発展させた原動力とは。

オ. チンパンジーとヒト、近くて遠いその理由。

問5. 本文を三つに分けたとき、最後の段落はどこから始まりますか。最後の段落の最初の五字を抜き出さない。

## 2

栄吉は和菓子屋である三春屋の跡取りとして、同じく和菓子屋の安野屋で修行をしている。菓子作りの練習に使う砂糖は、友人である一太郎（若旦那）の店から貰ったものである。ある日、栄吉はその砂糖を一太郎に返しにやってきた。以上を踏まえて文章を読み、問いに答えなさい。

「今回は作る菓子が多いから、場所が必要なんだよ。だからな、栄吉」

※米造がいつになく優しい声で、<sup>①</sup>噛んで含めるように言った。

「今回の菓子作りからは、お前さん、外れておくれ」

「えっ……」

栄吉は土間で木鉢を抱えたまま、立ちつくすしかなかった。

「店は今、本当に忙しいんだ。店表で売る菓子の他に、まず作り置きのお飾り菓子から作ってるからな。暮れてからも作業場を使っていてね」

だから当然、栄吉は菓子作りを練習することすら出来ない。それで砂糖を返しに来たのだと、栄吉は話をくくった。

すると若旦那が半眼になって栄吉を見てくる。だが言いづらいようで、なかなか口を開かない。しかし若旦那の隣に座っていた仁吉は平気で、あっさりと言ってきた。

「栄吉さんが今、菓子作りが出来ないの分かりました。けどだからって、何で砂糖を返すんです？ そいつはそりゃあ、日持ちのする品物なんですよ」

発句の会は大がかりに行くというから、開かれるまでに、まだ何日かあるのだろう。だが、それでも半年も先のことではあるまい。終わればまた、板間で練習が出来る。

「つまり栄吉さんの言うことは、<sup>②</sup>何か妙なんですよねえ」

その指摘に、栄吉が思わず下を向く。若旦那が静かに聞いた。

「ねえ、言っておくれな。砂糖を返してどうするんだい」

遂に……栄吉は白状することになった。

「つまり俺は今、というか、もう、というか……菓子を作り続ける気力が出ないんだ」  
いや、それだけでは無かった。

「そのね、不意に思ったんだ。今なら俺、菓子作りを止められるかもしれないって。いや考えたら、昨日も今日も、全く作っちゃいないんだよ」

なのに、何とかして作りたいという気持ちが湧いてこない。砂糖を若旦那に返し、己で練習するのを止めてしまったら、今度は何時菓子を作ることになるのか知れたものではない。今、菓子を作る板間に、入る事すら許されていないからだ。店の職人から、栄吉が菓子を作ったら砂糖が勿体ないと、言われたからだ。

だから。

「ふっと、思ったんだ。俺はいい加減、先々を思案した方がいいんじゃないかって」

常に他の者達から言われてきたことであつた。今ならまだ、何か食べていけるだけの仕事を、身につけられるかもしれない。いや、早く仕事を替えないと、そういうものを一つも習得できぬままに歳をくってしまふ。

「俺はその事の方が怖くなってきてるんだ」

言葉を吐き出して黙った。若旦那が眉根を寄せたまま、湯飲みを手取る。

「急な話だね、どうしてだい？ 栄吉は今までだって、あれこれ言われてきた。でも菓子作りが好きだという気持ちは、捨てなかつたのに」

「それは、その……」

言いにくい事であつた。しかし一太郎に、黙っていることも出来ない。

「一太郎、さっき、<sup>\*</sup>忠次さんが店に帰ってきたと言っただろう？」

そして人が余り、栄吉が板間から外れることとなった。

「それは仕方のない事かもしれない。場所は足りないし、俺は下手だしな」

だが。だが忠次が帰ってきた時、板間から外されなかった者がいた。そして④その事の意味が分かった時、栄吉は愕然としたのだ。そう、砂糖はもう要らないと思えたのは、あの時だという気がしている。

「栄吉、それは誰？」

「つまりさ、八助だよ」

「八助って、あの彦丸とかいう友達と一緒に倉の前にいた、あのお人だよ。彦丸さんとやらは確か、私と佐助が安野屋の者でも、出入りの商人でもないと思ってた人だよな」

若旦那が、何か含むところがあるような口ぶりで言う。そう言えば何か妙だったなとは思ったものの、今栄吉は他の話をするより、一気に心の内を吐き出してしまいたかった。

「八助は、安野屋に来てからまだいくらも経っちゃあいない奴だ。つまり菓子作りを始めたのは、つい最近なんだよ」

それだけではない。八助は友を勝手に店へ入れたりして、どうも真面目ではないところが見えてきてもいた。元々安野屋へ盗みに入ってきた盗人だった八助は、何とも尻が落ち着かない。

それでも、八助は菓子作りの一員に残された。栄吉は板間からはじき出されたのだ。

栄吉では力不足だと、頬をはられた思いがした。

「だけどそれは努力が足りなかったからじゃない。それだけは一太郎も、認めてくれるだろう？」

栄吉の言葉を聞き、一太郎は頷いている。栄吉が今まで山ほど笑われながらも、ひたすらに菓子を作り続けてきたことを、一太郎は知っているのだ。

「ということとは、これからも努力を続けたって、無駄かもしれない」

そう思い至ってしまった。もういい加減にしろと、神仏に言われた気がした。だから。

「何だか力が総身から、抜けてきちゃって」

まだまだ何年も、修業を続けるつもりでいた気持ちだが、己でも驚くほどしほみ、菓子を作る気にもなれなくなった。その内一太郎から貰った砂糖が気になってきたが、使うことも捨てることも出来ない。昨日の昼餉どき、どうしようかと漏らしたら、今朝方、八助が声をかけてきたのだ。

「八助は新米の己の方が板間に残ったのを、申し訳ないと言ったのさ」

そして、一太郎のところへ行きたいなら、今日は倉への荷運びを八助が引き受ける。だから番頭に、断りを入れると言ってくれた。店が忙しい時故、栄吉は一旦断ろうとしたが：：急に休みたくなつたのだ。

栄吉がいなくとも店は回ってゆく。八助だとて一日くらいいなくとも、何とかなるだろう。だから店を休んできた。

「本当に俺、これで菓子作りを止めるのかなあ」

己の口から、まるで他人事を語るような言葉が漏れ出てくる。そんなことを言っても、驚かない己がいた。⑤その言葉を聞いても、今は止めもしない親友が目の前にいた。

「最後に作った菓子って、何だったんだろう」

考えても、栄吉には直ぐに思い浮かばなかった。今回が最後だと気張って作った、一世一代の菓子じゃあ無かつた事だけは確かだ。溜め息が出てくる。

「畜生……」

気が付くと、そんな言葉を口にしていた。

「どうして、何でおれは八助みたいに、器用じゃなかったんだ」

餡子を作るのが下手でも、他にもっと使えるところがあったら、板間から出される事は無かつたかもしれない。

「畜生……」

いや、それ位では栄吉が三春屋を背負うのは難しい。やはり餡子が上手く作れないのでは、一人前の菓子職人にはなれない。元から駄目な話だったのかとさえ思えてくる。

「何でだよ」

どうして菓子屋に生まれたのに、ここまで向いていないのだ？ いや生まれというより、菓子作りは栄吉がやりたい夢であった。なのに、いかに必死になっても、どうにもならない。努力が、気持ちだが、見事なばかりに空回りしていく。

「畜生……」

今更落ち込むなんて、笑えるような話だと思う。さんざん粘って、あれこれやったあげくのことだ。そしてついに、もう耐えられなくなったのだから。

「もう、もう駄目なんだよ」

言葉が口からこぼれ出る。

「駄目なんだ。どうしてだ。何で不味いんだ？ 駄目だ。駄目、駄目、駄目！ 駄目で駄目でだめだめだめ……」

何を言っているのか分からぬ程に、繰り返していた。息が苦しくなってくる。期待をかけてくれている親に、申し訳ない。己が情けない。気が付けば涙が頬を流れ、畳に両の手をついていた。このままでは死んでしまふと思った。息が、止まる。

ずっとずっと、年寄りになるまでずっと、菓子職人を目指し続けていくことなど、出来ないではないか。誰も栄吉を食わしてはくれないのだ。なれる当てのないものを、ただ追いかけていく事が辛い。息も出来ない程、辛い。

「畜生……」

段々声が嘎れてきて、畳に突っ伏した。涙がまだ流れている。総身が震え続けている。

(ち、く、しょう……)

一 太郎がこの姿を、じっと見ているのが分かった。

友は栄吉に、何も問わなかった。そして、もう十分泣いただろうなどと言って、嘆くのを止めることもしなかった。だから栄吉は顔も上げられぬ思いに囚われたまま、随分と長く、そのままひたすらに、畳に突っ伏したままだった。

泣いた。

(畠中 恵『餡子は甘いか』より)

※米造・忠次……ともに栄吉の先輩である菓子職人

問1. — 線部①「噛んで含める」のここでの意味として適切なものを次のア～オから一つ選び、

記号で答えなさい。

ア. よくわかるように丁寧に説明すること。

イ. 傷つけないよう遠回しに言うこと。

ウ. やさしくゆっくりと話すこと。

エ. 要点を簡潔にはっきり伝えること。

オ. 相手に考える余地を与える言い方のこと。

問2. — 線部②「何か妙なんですよねえ」とありますが、何が「妙」のですか。空欄に当てはまる形で本文から抜き出し答えなさい。

栄吉が(あ 六字) (砂糖を(い 五字) (こと。



問3. —線部③「あれこれ言われてきた」とありますが、その内容として考えられるものとして不適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 下手だからやめたほうがいい。
- イ. おまえには才能がない。
- ウ. もういい加減にあきらめろ。
- エ. 菓子職人になどなれない。
- オ. 栄吉は練習がたりない。

問4. —線部④「その事の意味」とは何ですか。説明として適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. やる気の有無より才能の有無の方が大切だということ。
- イ. 八助には菓子作りの才能があるのだということ。
- ウ. このままでは親の期待に応えることなどできないということ。
- エ. 店の職人たちが自分のことを見下しているのだということ。
- オ. 努力をしたところで才能がなければ無駄だということ。

問5. —線部⑤「その言葉を聞いても、今は止めもしない」⑥「友は栄吉に、何も問わなかった」のはなぜですか。理由として適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 栄吉が誰よりも菓子作りが好きだと知っている一太郎は、菓子職人の夢を諦めるとい言葉が本気ではないことを見抜いているから。
- イ. 一太郎は栄吉の今までの努力を知っているだけに、菓子作りを諦めるとい言葉が中途半端な気持ちではないことを理解しているから。
- ウ. 八助より才能がないことに気づいたくらいで菓子職人になる気持ちが折れてしまった栄吉の心の弱さを情けないと思っているから。
- エ. 優しい性格の一太郎には栄吉の気持ちがよく分かるだけにどのように慰め励ましていいか分からず、困惑しているから。
- オ. 今までも辞めるべきタイミングがあつたのにも関わらず、今更辞めると言いだした栄吉の身勝手さにあきれているから。

問6. —線部⑦「だから栄吉は顔も上げられぬ思いに囚われたまま、随分と長く、そのままひたすらに、畳に突つ伏したままでいた。」における栄吉の心情の説明として説明として正しいものには○、間違っているものには×を解答欄に記入しなさい。

- ア. いくら否定されても夢を諦められない自分の諦めの悪さに苦しんでいる。
- イ. 期待してくれる親に対する申し訳なざでいっぱいである。
- ウ. 一向に菓子作りがうまくならない自分の才能のなさを情けなく思っている。
- エ. このままでは将来の生活が成り立たないことを不安に感じている。
- オ. 友人の前で取り乱してしまい、恥ずかしくて顔向けできないと思っている。

問7. 登場人物の説明として適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア. 八助は、元は悪人だが今は心を入れ替えて修行に取り組んでいる。
- イ. 米造は栄吉が板間から追い出すことができてせいせいしている。
- ウ. 一太郎は新人の八助の素性について疑いを持っている。
- エ. 仁吉は一太郎が言わないことも言う軽率な人物である。
- オ. 栄吉はふだんから口は悪いが正直な性格である。

### 3

—線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 豪華なキユウデンに住んでいる。
- ② 画像をスクリーンにトウエイする。
- ③ 正月にゾウニを食べる。
- ④ 君の発言のコンキョを教えてください。
- ⑤ これはゲンスタンダイの模型だよ。

### 4

次の空欄(あ)～(お)にあてはまるものをそれぞれ漢字で答えなさい。

- ① 一富士二鷹三(あ) (あ)はならぬ  
瓜の蔓に(あ)はならぬ
- ② (い)作って魂入れず  
(い)の顔も三度
- ③ 隣の(う)は赤い  
(う)より団子
- ④ (え)階から目薬  
(え)兎を追うものは一兎をも得ず
- ⑤ 渡る世間に(お)はない  
(お)の居ぬ間に洗濯

(以上で問題は終わりです。)